
 學 會

岡山醫學會第366回通常會

同會は本月21日午後4時より岡山醫科大學第1講堂に於て開會す生沼庶務主幹開會を報し直ちに次の講演に移る

1. 子宮癌患者の消化管機能に関する研究

岡山醫科大學産科婦人科教室

矢島 壽君

子宮患者に於ける消化器障碍の程度と之に及ぼす放射線療法の影響を觀察した研究である。先づ22名に就き胃液検査を行つた處正常酸度6人、減酸者9人、過酸者8人の割合となり局所病竈の蔓延程度と酸度との關係は明かではないが栄養の良否と酸度とは相平行する様である。之に「レントゲン、ラヂウム」の合併療法を行ふと分泌機能の上昇せる者9例、低下せる者12名、變化なきもの1例を示し、かかる状態は宿醉及び合併症の有無及び程度によつて左右せられ又或程度まで豫後と關聯する模様がある。次に25名の「レントゲン」撮影による胃腸運動機能検査に於ては正常緊張度を示すもの10例、緊張低下者11名、過緊張者4例を得、病期及び全身状態との關係は依然不定であるが放射療法の影響は酸度測定の場合と異なり大部分は運動亢進に傾き(17例)、變化なきもの(6例)及び運動低下せるもの(2例)は少數であつた。けれどもかかる機能變化と宿醉、合併症及び豫後との關係は胃液検査の場合と略ぼ同様である。

更に演者は動物實驗を企て加藤系肉腫を背部皮下に移植せる家兎及び健康家兎52頭に「バリウ

ム」を投與して「レントゲン」撮影を行ひ、又21頭には鐘江氏法による胃曲線描寫を試み専ら消化管の運動状態を觀察した。この成績では一般に衰弱して下利を發せる動物は著明の蠕動亢進を示し健康家兎と肉腫家兎との差は單に程度の違ひにして後者に於ては運動亢進例稍々多い感がある。尙ほ「レ」線5 H. E. D. 照射の影響は何れも運動促進的に作用するが之に對する「アトロピン」、「アドレナリン」及び「ピロカルピン」等の效果出現は不足であつた。

以上臨牀及び動物實驗より得たる演者の結論は次の如くである。

1. 腫瘍患者に於ける消化管障碍の出現は決して單一定型的ではなく、腫瘍發生時に見る全身機能の障碍による間接作用が主因であらう。
2. 放射線の影響は主として消化器の機能を促進するものであるが治療に隨伴する諸因子も亦著明の影響を及ぼすものと推定される。(自抄)

2. 余の耐酸性顆粒の研究 (續報)

1. 一新遊走細胞に就て
2. 一新淋巴腺内遊離小體

岡山醫科大學病理學教室

濱崎 幸雄君

1) 一新遊走細胞

演者は病理組織實習を擔任せる關係上年來、遊走細胞の鑑別教示に苦心するを常とせしが、從來の遊走細胞學を以てしては説明し得ざる一種の遊走細胞の存せる事に氣付けり。此の遊走細胞は移

行型を追及する事により滑平筋組織より發生するものなるべしとの想像を下し、既に昭和2年之を備忘録に記録せしか、如何せん當時は本遊走細胞の特殊検出法を案出し得ざりし爲之を發表する事なく荏苒今日に及べり。然るに耐酸性顆粒の研究に際し計らずも本遊走細胞が汞・耐酸性顆粒證明法によりて特殊顆粒を現す細胞なるを知り終に一新游走細胞なるを確定し得たるものなり。

本遊走細胞の特性。(1) 3種の特特殊顆粒を有す。即ち(a) 石炭酸「フクシン」沃度法にて耐酸性を有する顆粒。(b) 演者の既染色滑平筋纖維分離法によりて耐「アルカリ」性を有する顆粒。(c) 昇汞と強固に結合しLugol氏液にて昇汞を除去し難き顆粒。本顆粒は強「アルカリ」の作用によりて黒變す。(2) 滑平筋組織を母組織となす。余の既染色滑平筋纖維分離法を行ふ時は筋纖維より遊走細胞に至る有らゆる移行型を證明し得。(3) 種族特異性を有し人體及び猿のみに存す。(4) 組織内分布の特異性。(a) 生理的に滑平筋臓器に多數に存し、急性炎症に際して減少し慢性炎症、殊に結核性炎症に甚だ著明に増殖す。(b) 腫瘍組織中には本遊走細胞を缺如す。(c) 妊娠子宮には本細胞を認めず。(5) 「ヘマトキシリン=エオジン」染色標本に於ける特性。胞體は通常流線形、紡錘形、梨子狀形をなし滑平筋纖維と同色調に染り又同様の光輝を放ち結締織より鋭利に區分さる。核は長橢圓又は橢圓形をなし胞體の中心部に存し「クロマチン」質に富み結締織性並に組織球性細胞核よりは遙に濃染し「クロマチン」絲は纖細なり。粗雜なる組織標本に於ても本細胞の多くは易く鑑別し得るものにして、演者は實習標本に就き之を學生に示説し大なる困難なく(寧ろ他種遊走細胞よりも易く)理

解せしめ得たり。演者は尙は多數の顯微鏡標本並に顯微鏡寫眞を供覽し他種遊走細胞との鑑別に就て説明する所ありたり(Virchows Archiv H. 4, Bd. 295, 1935 掲載)。

2) 一新淋巴腺内遊離小體

本小體も亦汞・耐酸性物質を含有するために石炭酸「フクシン」沃度法にて明瞭に検出し得るものにして普通染色標本にては辨別するを得ず。本小體は紡錘形を呈し長徑2-4 μ 、鮮明なる紫赤色に輝き中心部に核様の濃染部を證明し得。新鮮材料の挫滅標本に於て光輝ある紡錘形小體として易く認め得、之に稀薄なる「メチレン」青、石炭酸「フクシン」、「クレヂールエヒトビオレット」を注ぐ時は小體は他の組織成分に比して速に着染し核を明瞭に示す。「ノイトラール」赤、「ニールブラウズルフアート」には淡染し又「ヨードグリユーン」、「コンゴール」赤、「ズダーン」IIIニハ染り難シ。

本小體は現在迄検査せし實驗動物(家兎、海狸、白鼠、犬、猿)には検出し得ず。人體の腹膜淋巴腺、殊に腸間膜淋巴腺、後腹膜淋巴腺に於ては著明なる病變無き限り常に多數に證明し得。尙ほ縦隔膜の横隔膜に近き淋巴腺中には往々小體を證明し得るも、肺門部、氣管枝、頸部、鼠蹊淋巴腺等並に淋巴腺組織以外の部には未だ證明し得ず。淋巴腺組織中に於て本小體は皮質に少く髓質、殊に髓質中に多し。尙ほ本小體は網狀織細胞、淋巴性細胞等の核中に發生するを認む。即ち核内に發生する事は一般耐酸顆粒と其の規を一つにするものにして特筆大書すべき事實なりとす。尙ほ本小體の生理並に病理に關しては目下尙ほ研究中に屬す。

右終りて午後5時30分閉會す。

◎ 岡山醫學會第367回通常會

同會は本年12月19日午後4時より岡山醫科大學に於て開會す。